



あまいるだより(天色便り)第51号
 特集/森と人をつなぐながはま森林マッチングセンター
 編集/あまいる探偵団
 (北岡七夏・志董未来・中野和子・藤井朋子・森優子)
 表紙タイトルロゴ/岸田知之
 発行日/2022年12月15日
 発行/特定非営利活動法人碧いびわ湖
 ~大切なことを他人まかせにしない。自分たちで力をあわせてつくる~
 TEL 0748-46-4551 FAX -46-4550
 Eメール info@aobiwako.org
 びわ湖の森を元気にするkikitoペーパーを
 使用しています(びわ湖の森の間伐材活用) **kikito**

イベント
 「メーブル部会」はじまります
 ながはま森林マッチングセンター

森に通って一緒に樹液採取などを行うメーブル部会をまもなく開始。2月にはメーブルトレッキングも開催予定です。詳しくはながはま森林マッチングセンターのHPをご覧ください。→ → →

Action 野洲川北流跡自然の森 署名活動も
 森の未来を考える新年会開催 してるよ

『野洲川北流跡自然の森』という、15年来地元のボランティア団体さんが整備する美しい森があります。ここが県立高等専門学校の建設予定地となりました。本当にこの森を壊してしまうの？保全を願う有志で、森の新年会を開催します！

主催 野洲市市民活動団体 はくはうす、みんなで子育て・あそび畑

2023年1月8日(日) 11:00~14:00
 @野洲川北流跡自然の森・どんぐり広場
 出店、ステージ、たき火もあるよ♪
 この取り組みの続報は → → →

Now ON SALE 何度も洗ってつかえるエコラップ
 ミツロウラップ 販売中 !! **Beeswax Wrap**

オーガニックコットンの生地にミツロウ(たまげん@信楽のニホンミツバチのミツロウ、オーガニックミツロウ)とオーガニックココナッツオイルと松ヤニをいい塩梅にブレンドして、あまいる探偵団が手づくりしています。(監修 Biwabochi ちまり)

▶取扱店 Base For Rest (東近江)、自家製酵母パンひとつぶ(能登川)、NPO 碧いびわ湖(安土)、自然食品と生活用品の店 hana(草津)、cafe あわいさ(信楽)

▶発送ご希望の方は、あまいるだより FB・インスタにメッセージにてお問い合わせください。(送料別途)

Sサイズ 13x13cm (半分に切ったリンゴなどに)
 Mサイズ 20x20cm (お皿に残ったおかずなどに)
 Lサイズ 26x26cm (サンドイッチやおにぎりなどに)
 LLサイズ 28x40cm、36x36cm (キャベツ半分などに)

手づくり市民メディア
あまいるだより



vol.51 森と人をつなぐ
 2022.12.15 ながはま森林マッチングセンター



森と人をつなぐ

ふかふかの落ち葉を踏みしめる
 風が木々を揺らす音
 時々何かがこちらを見つめる気配
 肩に落ちる陽のぬくもりと
 澄んだ湿っぽい空気が胸を満たす感触

あなたの日々
 森を歩く時間、ありますか？

長浜で森と人をつなぐ様々な企画をする
 ながはま森林マッチングセンターの
 橋本勘さんにお話をうかがいました

プロフィール

はしもと かん
橋本 勘 さん

長浜市在住。ながはま森林マッチングセンターの森林環境保全員として森と人をつなぐ活動を展開中。好きな果物はキウイ。

ながはま森林マッチングセンター

2016年に、長浜市、滋賀県、地元の企業・森林組合が構成団体となって設立。「森と人とのまんなかに」をキャッチコピーに、トレッキングイベントの開催やメーブル部会、養生アロマ部会の活動、森林の保全・調査活動などを行う。

あまいる(以下あ) この「ながはま森林マツチングセンター」、森に関わるたくさんの方々の素敵な企画をされていますよ。橋本さんはここでどんなことをされてるんですか？



橋本助(以下橋) 僕は二〇一七年から入って、この森林環境保全員というのをやっています、森と人をつなぐためのいろんな企画をしています。今、年間五十個くらいやっていますかね。

長浜市の「森林資源を活かした仕事づくりと移住促進を目指す」という目的があった、当初のキャッチコピーが「次世代の働く場と定住できる環境づくり」だったんですよ。でも僕も入ってやり出してみると、こんなハードル高くなって思ってた、もつと手前のことで色々かなあかんやろって話になって。もう人が森を必要としなくなってるんですよ、生活において。本当は必要としてるんですよ。でも一見、森が見えない。分断が起きてるんですよ。まずは、それをもう一度結び直していくようなことをせなあかんということ、途中からキャッチコピーが変わって「森と人のまんなかに」になりました。

あ 具体的にはどんなことをやっていますか？

橋 事業は大きく三つに分類して整理してるとすけれども、ハイキングの企画とか、森の保全活動に使うチェーンソーとかチップパーとかの道具の貸し出しなんかの「山を活かす」取り組み。調査とか保全活動をする「山を守る」取り組み。これには、奥びわ湖・山門水源の森とか、菅山寺の森、あと土倉鉱山っていう廃鉱が山奥にあって、その奥にトチノキの巨木が二〇〇本以上あって、その保全活動、トレッキングに行ったり巨木調査をしたりということが含まれます。ほかにも桜の調査や、地元の小中学校の山での学習活動・滋賀県の森林環境学習やまのこのサポート、地層の学習のお手伝いもしていますね。そして、週末林業体験とか、自伐型林業という小さな林業、個人で始められる林業の研修なんかの「山に暮らす」取り組みをしています。

最近では、グリーンウッドワークという生木を使った木工をされている、スーパースーパーの鈴木孝平さんという方が米原にいて、その鈴木さんを講師に生木からスプーンを作ったり。森のお掃除カフェってあって、森に不法投棄されたごみをお掃除して整えた場所、コーヒーを淹れて飲みましょってという企画をしたり。そうそう、森の植物からアロマオーターを作ったり、それを使ったテントサウナもやりました。

参加者をつくる活動の形

あ それは全部、橋本さんが考えたアイデアですか？

橋 僕が考えるのもあるんですけども、今は仲間を作っています。部会っていう形で。養生アロマ部会っていうのをやって、テントサウナしたり、「ハーブ王子を呼びたいね」という話になって、野草研究家の山下智道さんと山を歩く企画をしたり。カキドオシとかドクダミとかクロモジとか、もともとこの辺に生えているハーブを使って和ハーブ塩を作れないかなって考えてみたり。それは僕だけじゃなくて周辺に暮らしている興味のある人たちなんかも入って、アイデア出してもらって一緒に考えていく。僕一人のアイデアなんてやっぱり限られてますから。最近はそのなぶうにしています、事業を開放形にするって言うてますけれども、もう一つは弱目的性にする。歴史研究者の藤原辰史さんが言っていることですが、強い目的にしちゃうと排他的になってしまったり、どんどん息苦しくなってしまう、その世界は嫌なんで。何を言っても怒られないっていう雰囲気というか作れるのが大事かなって思っています。

あ 部会という形での活動はいつ頃からやっていますか？

橋 二〇一九年にメープルサポーターを始めました。テレビで、秩父の森の保全活動をやってる人が活動が終わった後に、カエデの樹液をとって温めてそこに紅茶のティーバッグを入れて飲んでるのを見て、衝撃を受けて。それで山門の森でもメープルシロップの採取ができるかなって思ってた。一月二十日頃に、カエデの木に直径一センチ位の穴を開けて、ニップルっていうのを差し込んでホースをつけてタンクに入れておくんですよ。それから一週間にいっぺん回収しに行くんですけども、トリートメント位たまってるんですよ。そのタンクを両手に持って、雪が二メートルくらい積もるんで、スノーシュー履いて山降りてくるんですよ。めっちゃ重いんですよ。それが一因にもなってるヘルニアになってね。こんなことやったらあかんって。それで、そこから二年間、メープルサポーターって形で仲間募集してやったかな。でもサポーターって名前、関係性がフラットじゃないでしょ。僕がやってそれを手伝ってもらって、なんかその関係性が嫌やなと思って。三年目からは「メープル部会」という名前にして、みんな考えて活動をやっているよという感じにしました。それが部会を作った最初です。その後の、養生アロマ部会や金居原フィールドワークという仲間で作るといっての原型で

す。そのメープル部会という毎年募集して、毎年解散するんですよ。タンク設置の前ぐらいに募集して、樹液が取れる二月いっぱいまでやって、それでも一旦解散。活動が長くなってくると息苦しさもあるかなって思ってた。時期も限られる活動だし毎年募集、毎年解散というのを実験的にやっています。

あ 部会のメンバーは活動日に来て、タンクの回収をしたり？

橋 活動期間中は毎週、山に入ってタンクの回収をして。それで、販売に出す分は道の駅の職員さんに作ってもらってますけど、一部自分たちでも樹液を煮詰めるシュガーリングって作業をして、メープルシロップにして食べてみたりしています。最後にタンクを回収するときに木の穴を塞ぐんですよ。メープルケアって言うてますけれども。

あ それはどうやって塞ぐんですか？

橋 癒合剤といって、雑菌の侵入しない葉があるんですよ、それを塗って。昔は丸木を杵みたいにしてコンコンコンと入れて、その上から葉を塗ってたんですけども、でもカナダではしてないよって聞いて、最近はその葉を塗るだけです。でも部会の中にもいるんな人がいるから、「癒合剤ってやっぱり化学的なものやから塗らん方がいいんちゃうか」って言う人もいたりして。だから僕がみんなに教えてやってもうっていう場所ではない。一緒にやってみるかなって考えてやっています。

あ 試行錯誤しながらです。そうなる部会の中で、「こうやら満月の日に樹液がたくさん出るらしいですよ」という話になって、それから調べてみようかとなった。

あ 今、メープル部会は何人ぐらい？

橋 二十五人くらい、毎年大体それぐらいです。いろんな人が来るので面白くて、小学生なんかもいて、学校休んで親子で来るんですよ。学校で勉強するよりもこっちの方が勉強になるからって。それでその子が家に帰って、お姉ちゃんにメープルの話をしたら、今度お姉ちゃんもそれに感化されて林業系の大学の学部に入らばいいかと。

あ すげえ！

橋 だからもう僕の手を超えて、いろんなことが勝手に起きてるんですよ。

あ 森に流れる時間

橋 WWW、ウッド・ワイド・ウェブっていいよ、木もネットワークを持ってコミュニケーションしてるよって話があった。木は根っこ菌根菌でもっているんな物質を送りあっている、これ、スザンヌ・シマールさんっていうブリティッシュ・コロンビア大学の先生が言ってるんですよ、隣り合ってるカエデどうしても樹液の出る量が全然違うって話があるんですよ。それが、僕は個性としか言いたいよって言うてたんだけど、WWWの話聞いてから、もしかしたら何かやりとりをしていて、その表れに僕は立ち会っているんじゃないかと思って。

あ 大きい木が小さい木を守るとかかっていうのも聞いたことがある。

橋 僕らにとったら木って止まってるよに見えんんですよ。それは時間の流れがあまりにも遅いすぎるから。でも樹液を通すと、ポタポタと樹液の落ちる周期が、時間帯とか木の種類とかによって違うんですよ。それが血液みたいに思えてくるんですよ。

あ へえ。

橋 彼らは彼らで確実に何か時間を編んでる。これで儲ける！がっちり！みたいな世界では全然ないんですけども、この活動に意義があるとしたら、時間軸の違うものに思いをはせる、異なる他者といかに共に生きるかという体験だった。あと思いついたら、という学びなんじゃないかと。木も思い通りになりませんから。樹液も回収に行ってみてゼロってことだつてあるわけですよ、ほんまに。それで木に八つ当たりしたって仕方ないんですよ。僕はそういう体験がなくて思いながらやっています。

あ そうですね、毎週通うことでそこにコミットする、その人になるんですよ。樹液って寒いとよく出るんですよ。そうすると自分が行かない日でも外が寒かったら、「今頃、樹液出しているに違いない」と思ったり。その時、自分の意識だけは森の中にある。時の流れって一様ではないし空間すら超えていく。たとえば英文学研究者の小川公代さんがカイロスの時間って言うてるんですけども、日常でも気付いたら「えっ！こんなに時間経ってる！」ってことあるじゃないですか。いわゆる時計で編んでいるような決まったリズムではない、主観的な螺旋状のような時間感覚のこと。まさに森との関係ってこういうのはカイロスの時間かって僕は思っています。

あ 森と人のまんなかで

あ これからやっていますか？

橋 まだまだ忙しいんですけども、僕自身。だから、もつと外部のコミュニティができていくといいかなって。金居原フィールドワークっていう名前がガイド養成講座を、セミクロスドでやったんですけど、そこから「もりのもり」という保全団体が生まれて活動してるんですよ。それってマツチングセンターの今後のあり方のひとつかなって思うんですよ。うちが直営でやるんじゃないかと、うちをきっかけに何か団体がポコって生まれて、そこが自立的に活動していく、それを応援するっていう。WWWじゃないけど、そうやって自主的に生まれたコミュニティ同士が、網目状に森林に関わる生態系を作るようなイメージで広がっていったらいいなと思っています。

あ あとはもう少し子ども向けの企画もやりたい。変な話、タモリを知らないんですよ、小学生が。地層の学習で「ブラタモリを知ってる人？」って聞いたらゼロでした。で、「もしかしたらタモリも知らない？」って聞いたら半分しか知らない。それで思ったのは、世界は広いんだなってこと。

あ 始まっているんですけど、タモリを知らない世界が。

橋 一方でね、炭素の話になった時に、木炭のことはやらなかったりするんですよ。それは「マインクラフト」というゲームで木炭を作るから。

あ うちの子ども、あつまれどうぶつ森にいろんな植物とか魚が出てくるから、琵琶湖博物館行った時に、「あ、これは採るやつ、これは釣るやつ」とって知ってるんですよ。

橋 かと言って、今の子どもたちがダメだとかじゃなくって、おかげで生き物をやらなかったりするから、学びのやり方が増えたんですよ、住む世界が多様化してる。でも、バーチャルな情報、文字情報で書かれたものの行間を埋めるっていうのはやっぱり体験がないと難しいのかもしれないですね。だから、子ども向けのイベントももっとしたいですね。あとはもつと静かな企画もやりたい。ヨガとか、森の哲学カフェみたいな。

あ 時間の流れを変えてね。

橋 そうそう。カイロスの時間。

あ これからも楽しみです。お話をありがとうございます。

あったりする。もうすこし良い環境を造れるのではないかなと思う。

僕は3年くらい前から周辺の山の木々の芽生えを集めて育てている。荒れた人工林を広葉樹林に転換するタイミングなどでいずれば山に返すが、ただ植えるだけでは持続的な森は造れない。植物園の柵は例として極端だが、尾根に柵を植えても健全な森には育たないだろう。それぞれの樹種に住みよい(生態系のなかでの役割を最大限出せる)環境があり、さらには多種との相互作用もある。こういったことへの考えを深めることは僕が大学に入った理由のひとつだ。地元の山々を歩き回った経験と大学で身に付ける専門知識で、里山・奥山を自然なカタチで甦らせたい。最近の講義では、ある土地についてヒノキ人工林の向き不向きを知る手法や、溪流沿いの林の構造などとても面白いことを学べている。植物園の柵を見守りつつ、大学での4年間で広い知識を得ていきたい。

むこうでもそろそろこの花が咲くのだろうと想い遣ったりしている。絶滅しかかっているような植物も観察することができるので、興味の尽きることはない。

しかし、造られた自然の不自然さが目につくときもある。この夏、暑さにまいてる冷温帯の植物を見ては自分と重ねてしまった。本来彼らは下鴨に生きる植物ではないのである。特に不憫なのは柵だ。僕にとって柵は特別な樹で、植物園でもまず探した。植物生態園にいた柵だが、どうも幹に元気がない印象で、折れた枝の根本には樹脂が塗ってあった。春に大きな葉を展開したものの、9月には枯れたような黄色になっていた。元来柵は水気を好み、谷沿いで枝と根を大きく広げて巨木へと成長するが、密に植物が育つここでは水を求めても根を伸ばせず、すっかり弱って風格を失っているように見える。植物園の性質上仕方ないことではあるが、住宅街の公園にたくさんの実がなる元気な柵も

暮らしのコラム 植物園の柵に想う

ふじむら たるう 高島市朽木出身 藤村 太郎 京都府立大学出身



この春から通っている京都府立大学は、植物園に接しているというのが売りのひとつ。森林に関わることを学ぶためにこの大学の森林科学科に入った僕にとって、空き時間にちょっと寄れる植物園があるというのは出来すぎた環境だ(学生は無料!)。このコラムを書いている11月は、日々移ろいゆく世界中の木々の彩が楽しめる。

植物園には楽しいエリアがいくつもあがる、最も頻りに訪れているのは植物生態園だろう。この区画には日本の植生がぎゅっと集約されている。滋賀の実家周辺の慣れ親しんだ植生もあり、